2025 年6月 15 日 教会創立記念礼拝

メッセージ「重荷を負っても生きる」　　牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 11 章 25 － 30 節

私たちの久宝教会は、昨日 6 月 14 日が 65 回目の誕生日でした。そして、先ほど歌った賛美歌「埋もれた宝」は、旭丘まぶね保育園が開園した 1982 年頃に、久宝伝道所の創設者・小林達夫牧師と親しかった八尾東教会の有澤禧年(ありさわつぐとし)牧師が作って、プレゼントしてくれた賛美歌だそうです。

普段はあまり歌わない賛美歌ですが、4 番まである歌詞を見る度に、とてもよく出来た歌だと思わされます。

① 畑の中に埋もれた宝、気付いていない人にとっては、ただの畑の土。しかし、その中にこそ宝がある（マタイ 13:44）

② 豪華なお城の中にではなく、粗末な家畜小屋の馬槽(まぶね)（飼い葉桶）の中に、『まさかこんな所に』と思われる所に生まれた赤ちゃんこそが、救い主だった（ルカ 2:6−7）

③ 落とせば割れてしまうような土の器である私たち自身の中にも『埋もれた宝』は確かにあり、輝いている（第 2 コリント 4:7）

④ そのような『埋もれた宝』は、隣人である仲間たちの中にも見つけることができ、その実りを『収穫の主』と一緒に私たちは刈り取る（マタイ 9:37−38、ヨハネ 4:38）

という内容の賛美歌です。

ですが、最初と最後にある「この教会には夢がある」という言葉は、今の私たちにはどのように響いているでしょうか。この讃美歌が作られた約 40 年前、またこの久宝教会が創設された 65 年前と、今とでは「ここには夢がある」という言葉の響き方は大きく変化してきているのではないでしょうか。それは単に、教会に集まる人数が、かつては多かったけれども、今ではすっかり少なくなってしまった、というだけの話ではありません。私がそのことを考えたのは、先日 70 代の方と話している中で、「最近の人たちは何だか元気がない。夢がない。もっと元気になれるような夢をみんなで描けるといい」と言われたからでした。もちろん、誰が考えても、元気がないよりは元気がある方がよいですし、夢がないよりは夢がある方がよいに決まっています。その方の提案も、決して今の、最近の人たちを「夢がないから悪い」と責めているわけではなくて、「みんなで描ける夢を持ちたいね」という前

向きな提案であったわけですが、この言葉を聞きながら、私は違和感を拭えませんでした。というのも、「何を食べたい」とか「どこに行きたい」というような個人的な夢、すぐに実現可能な小さな夢はともかく、周りの社会や世界に目を向けた時、明るい夢を描こうとは、とても言いづらい現実があるからです。

先週は、ようやく梅雨入りしたと思わされるような天候でしたが、やってきたのは梅雨だけではありませんでした。とうとう、イランとイスラエルの間でも戦争が始まってしまい、すでに何百発ものミサイルの応酬が続けられているようです。これまでにも続けられていたロシアとウクライナの戦争や、パレスチナ・ガザ地区での戦争、虐殺なども未だに続けられています。ミサイルやドローンなどが飛び交い、多くの命が傷つけられ、奪われることが各地で一向に止みません。多くの血と涙が流され、命が脅かされ、奪われている中にあって、人々が抱くことのできる「夢」とは一体どのようなものなのでしょうか。

何故、今、私たちはこんなにも息苦しいと感じるのか。閉塞感に満ちた時代だと感じるのか。今と昔と、それこそ 40 年前、50 年前とでは、何が違うのか。もちろん、日本社会だけを見ても、少子高齢化は進み労働人口は減り、経済は「失われた 30 年」を経て停滞・衰退し、農業や漁業など第一次産業に従事する人は激減し、主食であるお米すら足りないと言われるようになりました。しかし、もっと根本的な一番の原因は、人々が単純には騙されなくなった。自分たちの首に確かに縄がつけられていることに気が付いた。それを「忘れなさい。見ないようにしない」と言われても、目を逸らしたり、忘れたり出来ないくらいに、はっきりと目に映るようになってきた、ということなのではないかと、私は感じています。

2011 年の東日本大震災による福島第一原子力発電所の核事故から 14 年を過ぎてもなお、メルトダウンした原子炉の廃炉作業は何も始めることが出来ないまま、放射能は漏れ続けています。核兵器によって戦争は抑止できるという名目で、世界中の国々が核兵器を増やし続けてきましたが、実際には抑止されるどころか、各地で戦争が広がり、核兵器が使用される危険性が高まっています。この地球を何回も破壊し、人類を何回も根絶し得るだけの核兵器や、原子力発電所などの核施設が世界中に満ち溢れています。また世界中の環境破壊により、気候変動は深刻になり、資源の枯渇も、自然災害の激甚化も年々進んでいます。

そのような現代を生きている私たちの様子を、「まるで絞首台の上で、首に縄をかけられたまま、目の前にご馳走を並べられて、『さぁご馳走を楽しんでください。

まだしばらくは、きっとあなたが生きている間は、床は抜けないと思いますから、安心して召し上がってくださいね』と言われているようだ」と評した人がいました。確かに誰もが、いつかは死ぬ命です。ですが、「どうせいつかは死ぬんだから、そんな先のことを心配してないで、今は、目の前のご馳走を楽しもうよ」と言って、自分の首に巻かれている縄、いつ抜けるかもしれない床板から目を逸らして、どれだけの人が楽しく過ごせると言うのでしょうか。もちろん、今から 70 年前であっても、いつでも、そのような縄は人類の首についていたわけですが、先の戦争の傷跡と記憶が新しかったために、そのような愚かな事を繰り返すはずがないという大きな反省と、また高度経済成長期には、人々の目と心を奪うような華やかなものが周りにあふれていたから、水に流して忘れたことにしていた、事実に蓋をして隠ぺいすることが出来ていたのではないかと思います。しかし、今や、その事実がいよいよ隠し切れなくなってきた。目を向けざるを得なくなってしまった。そういう時代状況になったのだと思っています。

今年の 4 月から大阪湾の夢洲で開催されている「大阪・関西万博」は、開幕から 2 か月が経ち、日々の来場者数も増えてきているそうで、確かに身近なところでも、学校の遠足で行ったという子どもたちや、実際に行ってきたという方のお話を聞く機会も増えてきました。「いのち輝く未来社会のデザイン」というのが、今回の大阪・関西万博のテーマのようですし、実際に行ってみたら、普段は目にすることのない珍しい発見や出会いがあって面白いのかもしれません。しかし、多くの方々によって調査・報道がなされている通り、この万博自体が、嘘と隠ぺいの上に立っていることには変わりはありません。

「このまま来場者が順調に来たら、黒字になりそうだ」と言いつつ、そこには建設費もインフラ整備費も含まれておらず、単純な会期中の運営費がトントンになるというだけです。経済効果 3 兆円が見込まれるというお手盛り予想がなされている一方、インフラ整備と建設費には 13 兆円もの税金が投入されていて、採算など取れるはずもない大赤字です。工事費が未払いで完成できておらず、開館されていないパビリオンすら、何軒もあるとも言われています。そもそも半年間だけ開催したら、あとは全部取り壊して撤去して、インフラが整備された跡地にはカジノを造る。そもそもカジノを建設するのが目的として計画が始められた万博ですから、「いのち輝く未来社会のデザイン」を展示するという万博自体の目的が初めから嘘ということになります。

また会場となっている夢洲はゴミを埋め立てて造られた人工島で、まだ年数も浅いので、地盤が緩いという危険性が指摘されていましたが、地盤沈下や軟弱地盤などの他にも、地中から噴き出している可燃性のメタンガスや、今、大発生しているユスリカも、レジオネラ菌も問題となっています。それらはいずれも始めから分かっていたことでした。人間が捨てたゴミには栄養がたくさん含まれているために、夢洲周辺の海では栄養過多となり、その栄養分を素にしてユスリカが大発生し、そのユスリカを食べるために、野鳥が多くやってきて、夢洲は万博の工事が始められるまでは、世界有数の野鳥の楽園となっていたそうです。全世界的に絶滅が危惧される希少種の渡り鳥も観測されていた程の貴重な湿原となっていた所に、今回万博とカジノを造るために新たに土が入れられて造成され、そこに生息していた生物たちが追い出され、コンクリートで固められ、メタンガスまでもが封じ込められてしまいました。その結果、多くの事故や問題が発生しています。

自分たちに都合の悪いもの、計画になかったものは、初めから存在しなかったことにして、その上で表面的にキレイなものを作って「いのち輝く未来社会」と言ってのける。事故や問題が起きても見て見ぬふりをして、隠ぺいする……。しかし、本当の「いのちの輝き」とは、そんな浅はかな人間の思惑を超えて働く不思議、大自然の力のことではないでしょうか。そもそもユスリカが大発生したのも、人間の手に余ったゴミを処分したことによって過剰となった水中の有機物を分解するためであり、その結果水質は徐々に改善され、またそこに貴重な野生動物たちが戻って来ていたわけでした。そのように自然は、長い時間をかけて破壊された均衡を取り戻そうと常に働いている……。そこにあるものこそが本来の「命の輝き」であり、また決して失われない「夢」とも呼び得るものなのではないかと思います。

私たちが「夢」と呼ぶものは、極々身近で、利己的なものが多いかと思いますが、それらの行き着く先は暗いということが、もう目に見えています。しかし、それでも私たちは希望を失うことはしません。それは首にかけられた縄を忘れよう、見ないようにしようということではなくて、あくまでも事実は事実として受け止めながら、それでも全ての命を創られた神による不思議な働き、導きを信じて、事実を受け止めるところから、その道を歩むということ、神の働きに賛同していくということが、確かに出来るのだと思います。

今回の聖書の言葉は、よく教会の看板や、案内チラシにも書かれている有名な言葉です。

> [28] すべて重荷を負って苦労している者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。[29] 私は柔和で心のへりくだった者だから、私の軛(くびき)を負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に安らぎが得られる。[30] 私の軛は負いやすく、私の荷は軽いからである。

イエス様がこの言葉を語られたのは、社会の底辺に置かれ、その日の糧を得るための労働に就いていた人たち、そしてまた様々な障がいや病気などのために差別され、社会から排除されていた人たちでした。そのような、日々「苦役」や「差別」、「苦難」の軛を負っていた人たちに対して、イエス様は「私の所に来なさい。あなたたちの軛を外してあげましょう」とは、言われませんでした。なぜなら、私たちの日々の生活の中から、重荷が一切無くなる、ということはないからです。もしも「一切無くなりました」と言ったら、それは見て見ぬふりをしているだけの嘘でしょう。30 節にある「私の軛は負いやすく」という言葉は、私の軛は「楽である」「心地好い」の他にも、「適した」とも訳せる言葉です。例えば、自分の足のサイズと靴のサイズがぴったりと合っていたら、無理がなく楽で心地好いように、軛が自分の肩や首の形にぴったりとフィットしていたら、大きな荷物でも意外と軽々と担えることがあるのだろうと思います。

また「軛」と聞くと、私は牛が一頭で車を牽いているような「一頭立て」の様子を想像しますが、古代イスラエル社会における「軛」は、二頭立てだったようです。ですから、「私の軛を負いなさい。それはあなたに適している」という言葉には、「あなたの隣に、あなたと共に軛を負う仲間・助け手も備えましょう」ということも含まれているとも考えられます。

29 節には、イエス様がご自身のことを指して、「柔和で心のへりくだった者」と言われています。以前の新共同訳では「柔和で謙遜」と訳されていましたが、これらの言葉の元の意味や、他の箇所との比較などから、「私は抑圧にめげない者、心底身分の低い者」というイエス様の自己理解の言葉として理解することが出来ます。「柔和」と聞くと、誰にでも優しく穏やかであることを連想しますが、イエス様は人を抑圧し差別する悪には、ハッキリと抵抗されました。それは自分自身も社会の底辺で、差別・排除され、抑圧されて来たからこその共感でした。自分自身もその重荷を知っているからこそ放っておけない。黙って見てられない。それがイエス様

の原動力であり、そのイエス様が「私に学びなさい」、私を見習って同じようにしてみなさい、と言われています。「そうすればあなたがたの魂に（あなた方自身に）安らぎが得られる」……。

重荷から目を逸らして、見て見ぬふりをするのではない。抑圧者側、他人の足を踏みつける側、権力者側に立って、自分自身に嘘をつくのでもない。イエス様のように、神様と共に、神様に助けられながら、事実に目を向けて、その荷が重くても、一歩ずつ歩みを進めていこう。なぜなら、その軛はあなたにフィットしていて、さらにまたあなたの隣には、あなたと共に軛を負う仲間がいるから……。そのようにイエス様の後に従って歩む時、私たちは重荷を負っても、なお生きていくことが出来るという奇跡、神様の働きを見せてもらえるのではないかと思います。

今日よりも明日の生活が楽になること、重荷がどんどん軽くなること、というような単純な夢が嘘だった、ということに気づいてしまった現代です。そのような時代だからこそ、私たちは自分の肩に載っている重荷、また隣の人の肩に載っている重荷に目を向けていきたいと願います。そして、そのような重荷を負う中に共にいてくださる神様、また世の中から、価値がないと見なされて、見放されているものの中にこそ、神様の力が働くということを、認めていきたい、確かめていきたいと願います。そこにこそ、これからの時代の教会の夢、埋もれた宝があるのだと思っています。